

## 発達障害の子どもの‘人とかかわりたい’思いに応える看護

2012年に行われた全国調査によると、発達障害の可能性のある子どもは通常学級の1クラスに2~3名いるといわれています。発達障害の子どもは、人とうまくコミュニケーションをとることやじっとしていることなどが苦手です。これは子どもの特性であり、個性です。一人ひとりの特性や個性に応じたかかわりが大切です。

児童精神科病棟に入院中の発達障害の子どもにとって、看護師のかかわりはアタッチメントの形成や修復、他者とのかかわりや関係形成において重要な意味を持つと考えられます。そこで、他者とうまく距離をとることができない発達障害の子どもに対して看護師がどのようにかかわっているか、かかわりの意味は何かを明らかにするために、本研究を行いました。本研究では、発達障害の子どもと看護師とのかかわりを中心に、子どもの家族や病棟で働く他の医療者とのかかわりも含めて観察を行いました。

継続的な観察や看護師等へのインタビューから、看護師が子どもと他者とのかかわり方や関係性、距離の近い状況を観察し、感じ取った距離の近さや関係性の情報を他職種と共有して積み重ねていることがわかりました。それは、子どもの距離の近さや思いを受け止め、子どもの本質的な性格を捉えて全人的に理解しながら子どもをありのまま受け止め、子どもの距離が近い理由とその意味を見極めるかかわりでした。さらに看護師は、子どもに適切なかかわり方を教え、落ち着く状態に導き、子どもと大人との信頼関係を修復し、子どもらしい体験を補うことで、子どもの‘人とかかわりたい’思いに応えていました。こうした看護師のかかわりによって子どもは、他の子どもと一緒に遊んだり思いの言語化ができたりするように変化し、成長していました。

本研究に参加して下さった発達障害の子どもがもつ限りない可能性を信じて日々行われている素敵な看護が広がって、より多くの子どもと家族を支えていくことができれば幸いです。